

樂園 第2話

takamiism

『穴しかない』

「たしか、『現に』についての話が、あったよね？」

「まさに」

「それは、いつのことなの？」

「まさに今」

「今この瞬間、ということ？」

「そうとも言えるかな」

「それなら、過去と未来も、あるわけだ」

「どうして？」

「今というのは、現在のことだよね？」

「『現に』は、『現在において』の省略形と言えるかもね」

「現在ということは、過去・現在・未来というふうに、なっているんじゃないの？」

「前後に、何かがある？」

「何かというか、時間というか」

「でも、時間というのは、そんなふうに一直線になっているかな？」

「あれ、違う？」

「むしろ、どうして、そう思うの？」

「いや、どうして、と言われても」

「それが何であるにしろ、現に今しかないんじゃない？」

「あれ、似たような話を、前にもしたような」

「そうだよ」

「そうすると、過去や未来は、どうなるの？」

「それは、同じもの？」

「え？」

「まずは、過去から考えてみよう」

「過ぎ去ったもののことだね」

「今は、ない？」

「もう、ない」

「かつては、あった？」

「うん」

「それは、どこへ行ったんだろう」

「どこへ、というのは、何が？」

「過去は、消え去ったのかな？」

「今は、ないよね」

「過ぎ去り、消え去ったものは、過ぎ去り、消え去ったものとして」

「あれ、それは」

「まずは、出現しなければならない」

「また、それ？」

「次は、未来について、考えてみよう」

「まだやってきていないもの、ということかな」

「今は、ない？」

「まだ、ない」

「いまだやって来ていないものは」
「いまだやって来ていないものとして」
「まずは」
「出現しなければならない？」
「その通り」
「だいたい、わかってきたよ」
「それは、また」
「それが、『現に』というやつなんだよね？」
「とりあえずは、そう呼んでおこう」
「本当は、違うの？」
「いや、わからない」
「自分で名づけたのに」
「たとえば、『今』と言ってもいいし、『ここ』と言ってもいいかもしれない」
「色々な呼び方が、あるんだね」
「いずれにせよ、それしかない、という意味だけど」
「それ？」
「これしかない、というか」
「他のものがない、ということ？」
「比較できるようなものが、ない」
「でも、『今』なら、『過去』や『未来』と比べることができるよ」
「そうだね」
「認めちゃったよ」
「だから、言い方として、適切ではないかもしれない」
「『ここ』も、『そこ』や『あそこ』と比べることができるね」
「その言い方も」
「不適切？」
「かもしれない」
「では、どういうふうに言えば、適切な言い方になるの？」
「できないかもしれない」
「そうなの？」
「言葉には、できないかもしれない」
「言葉にできない、という言葉にはなっているけど」
「言葉の限界、だよね」
「でも、言葉の限界という言い方は、できるんだね」
「言葉にすることで、言葉の中に入ってくる」
「でも、言いつくせない？」
「言葉にすることで、言葉にできない何かがある、ということが、よくわかる」
「たとえば、神さまは、どうなるの？」
「超越した存在のこと？」
「ここまでの『現に』についての話は、どこことなく、神さまに似ているよね」
「神は、神として」
「はいはい、わかったよ」
「だから、『現に』は神よりも強い、と言ってもいい」
「強いなの？」
「あらゆるところ、あらゆるときに、『現に』あるわけだから」
「目には見えないんだったね」

「『現に』という神は超越していない、と言いかえてもいいかもしれない」
「また、難しくなってきたね」
「要するに」
「おや、まとめてくれるんだ」
「神は我と共にあり」